

今のパラグアイを知ってもらうために — 南米を眺める新たな視点 —

上田 善久

知られざる国パラグアイ

本稿の目的は、最近のパラグアイの著しい変貌ぶりを伝えることにあるが、これはかなりの難題だ。依然として当国の一般的なイメージは、「南米主要国の狭間にある、内陸の小さな貧しい発展途上国」というものだろう。人々の興味を呼ぶのに不可欠な要素である「豊富な地下資源」も「素敵な観光資源」も「大規模なマーケット」も乏しく、地球の反対側の小国でしかないこの国を知る人は少ない。

そこまでは仕方なしとしても、日系社会の存在感についてもさほど知られていないのは、いささか残念だ。彼らは経済発展の主要な担い手として、バイカルチャーを維持しつつ、敬意と信頼を得て様々な社会分野で活躍し、同化している。この景色を伝えるべく、筆者は在パラグアイ日本大使館 HP【パラグアイ便り】の中で、具体的な活動や報道振りを紹介してきたが、その行間から、当国日系社会を感じていただければ幸いである。

パラグアイの国土は広大な平原と丘陵に覆われ、豊富な水と開放的で肥沃な大地に恵まれており、この地理的環境を反映して国民性もおおらかで、尖鋭なイデオロギーによる社会階層分断的な動きは見られない。

人口の大宗は地元グアラニ族とイベリア半島人との混血（メスティソ）で、国のアイデンティティー（グアラニ語がスペイン語とともに公用

語、通貨単位もグアラニ）もそこにある。他方、世界各地域からの多くの移民社会（日系社会もその一つ）が混在しているが、この多彩な人間での摩擦や対立もない。日常的にもメディアの世界でも、排外的な言辭が一切聞かれないこともラテンアメリカ諸国を取り巻く一般的な政治的風景とは異なっている。

この穏やかで切羽詰まったところのない状況が政治レベルでの弛緩や汚職を招き、司法もふくむ公的部門全体の機能不全を印象づけてきたことも否定できないが、これを是としてきた政治社会風土も、

【第18回 パラグアイ便り】で述べたように徐々に変化を見せ始めている。

パラグアイ経済社会の急速な変貌

この変貌の背景には、長期にわたるマクロ経済の安定と一貫した自由開放経済政策の継続により民間セクターが地道に力をつけてきたことが指摘できる。近年、周辺諸国の経済停滞が続くのを尻目にパラグアイの経済構造は着実に変化し、その成果がここ2～3年で急速に顕在化してきた。

まず外国からの直接投資の増加である。隣接大国のブラジルやアルゼンチンで長く続いた左派ポピュリズム体制は、過度な労働者保護や複雑な税制度による高コスト体質によるビジネス環境悪化をもたらしてきた。この閉塞状態から新天地としてパラグアイに製造

拠点を設置する動きが始まり、周辺諸国のみならず欧米諸国も注目している。とくに製造業を中心に良好な投資環境に着目した経済ミッションの来訪が増加、投資実績も順調に伸び、パラグアイの比較優位性に着目した動きは巨大南米市場を睨む「メルコスール戦略」として自然な流れとなっている。

決定的に遅れていた交通インフラも、外国企業進出の流れに呼応して新規建設や整備事業が本格的に始まった。空港から市内に至る道路、市内各所の立体交差、主要都市間国道の拡幅工事、地方道路の舗装化など順次進んでおり、来年にも空港拡張プロジェクトが実施される予定である（対外債務残高は対GDP比20%程度と低く、投資格付も改善していることから、インフラ整備のための借入能力は高い）。

民間部門では、長く穀物輸出の一本足打法であった農業分野で、牧畜業や農業加工部門が急速に伸び、近年とくに牛肉輸出が量・販路とも著しく拡大している。

民間投資や個人消費も好調で、高層オフィス・居住ビル・ホテルや大規模商業施設などが続々と完成しており、日々どこかで盛大な開業イベントが催されている。また芸術活動も盛んで、秋冬のシーズンにはコンサート、オペラ、演劇、美術展などが各所の劇場や会場で開催されている。

このように経済・産業構造の多角化が確実に進展しており、日々

の街の賑わいや景観の変化を眺めているだけでもこの国が経済好循環の局面に入っていることが実感できる。



続々と開店するアスンシオンの大型商業施設
(筆者撮影)

地域における政治的存在感の高まり

2013年8月発足の現カルテス政権が一貫して推進してきた開放的経済政策の効果で社会が変貌するなか、南米における政治・外交面でのパラグアイの存在感の高まりも指摘しておかねばならない。

ここで少し政治状況を振り返ろう。4年前の2012年6月、南米が左派ポピュリズムに席卷されていた時代に、パラグアイ議会は憲法に従い当時の左派ルゴ大統領を弾劾し辞職に追い込んだ。アルゼンチン・ブラジル・ウルグアイはこれを「非民主的な政府転覆」としてメルコスール資格を停止するが、この真の動機は長く左派の盟友(?)ベネズエラの加盟をブロックしていたパラグアイを排除することであった。この資格停止から僅か5日後の早業でベネズエラの加盟が実現し、パラグアイは孤立することになる。

以来、メルコスールは左派イデオロギーへの傾斜が顕著となり、経済同盟として機能不全に陥り、後発の「太平洋同盟」(メキシコ、コロンビア、ペルー、チリ)の急伸展との明暗が決定的になる。

カルテス大統領は就任後直ちにメルコスールに復帰し、昨年底期にパラグアイが議長国を務めた際には、本来の経済共同体としての路線への復帰を主張する。さらに本年下期の順送りによるベネズエラへの議長国移譲についても、ベネズエラ政治体制の現状に鑑み当初より強く反対。4年前に「パラグアイ排除とベネズエラ加盟」を主導したブラジル、アルゼンチン両政府も、自国での左派ポピュリズム政権の自壊にともない民主主義、人権尊重等の普遍的価値に立脚したパラグアイの主張に同調するようになる。こうした流れの中で12月2日、4年前とは正反対に今度はベネズエラの加盟資格が停止され、パラグアイの方向性の正しさが歴史によって証明される形になった。

このようにパラグアイは小国としての立場を認識しつつも、いつの時代にあっても終始一貫性と独自性を保ちつつ、徐々に政治・外交面での存在感を高めてきた。この事実も是非読者の皆さんに知っておいていただきたい。



メルコスールで存在感を発揮する
カルテス大統領とロイサガ外相
(パラグアイ大統領府 HP より)

日本人移住社会の存在感と移住80周年の理念

冒頭指摘したように、パラグアイ日系社会は、絶対的(人口約1万人)にも相対的(全人口比0.1%)にも僅少であるにもかかわらず、パラグアイで多大な存在感を発揮している。日本人移住80周年である本

年は式典やイベントが各所で連日のように実施されたが、多くが非日系にも開かれたイベントで、パラグアイ側から提案・実施されたものも多くあった。

9月には秋篠宮家の眞子内親王殿下の式典御出席と各移住地への御訪問が実現、記念式典は三権の長や主要閣僚全員が出席する行き届いた内容で、また連日の敬愛に充ちた報道で国中に眞子さまフィーバーが沸き起こった。

この80周年の特徴は、当館HP【パラグアイ便り】で紹介してきたように、移住者社会だけの祝典に閉じこもることなく、パラグアイ官民の各種団体も積極的に関与・主催していることである。5月には下院議会が本会議場で記念切手発行式とともに移住式典を主催し、その他観光庁・アスンシオン市・イタプア県・パラグアイ外交官協会ほか各種の団体により様々な祭典や行事が実施された。

また10月には、上院超党派により『日本人移住者の国の発展への貢献に対する感謝決議』が採択され、伝達式が上院会議場で執り行われる。さらにフィナーレともいべき『日本祭』は、日系若手グループが企画し実現させた大イベントで、市内競馬場到大舞台や櫓を設置し、80余の和食や物産展のスタンドを準備、1万8千人もの一般観衆が和食、盆踊り、県の物産展、和楽器演奏などを夜遅くまで満喫し、文字どおり日系社会がパラグアイに溶け込んでいることを実感させる素晴らしい夕べとなった。

新たなパラグアイとの関係作りに向けて

戦後の日本の対パラグアイ政策は、移住事業と移住者支援に始ま



2万人近くの一般市民で賑わう食と文化の祭典「日本祭」

(Juan Yamaoka 撮影)

る。この同胞の存在を背景に、質量ともに充実した経済・技術支援が長期にわたり実施されてきた。主要道路、地方空港、環境センター・学校・職業訓練校・農業試験場・病院・公会堂などの公共施設から音楽・スポーツ分野にいたるまで、津々浦々で日本の援助資産が活躍している。また技術協力分野でも、農工系の技術指導から教育・保健・スポーツなど各分野で過去2千人近くの日本の専門家が活躍、また4千人もの研修員が日本で学んでおり、彼らの活動ぶりは無形の資産としてあちこちの地域や組織に根付

いている。

にもかかわらず、資源のない小国として、民間経済関係や南米外交戦略上の位置付けは弱かった。このことは長い二国間の歴史での閣僚訪問が1997年の労相、2011年の外相(国際会議出席)の僅か2回、また大規模経済団体ミッション来訪はゼロであることから窺える。

このようにこれまで地域戦略を考える際に顧みられることはなかったが、総じて停滞・混迷気味の南米地域でパラグアイが過去にない存在感を示している状況から、日本の対南米戦略に新たな次元が開

かれつつあるといえるだろう。

日本として、歴史的に大きく左右に揺れ動くブラジル・アルゼンチンなどの大国の動向に引き続き敏感に反応するのは当然としても、このタイミングでパラグアイへの日本の関心を示し、またパラグアイの視点から南米を観察することは、他の南米諸国との外交やビジネス関係でも効果的なインパクトを与えられるはずだ。

これまで日本から南米への来訪者は、近隣国まで来ててもそこで踵を返して帰国するのがパターン化していた。しかし、今後の南米地域の展開を見据えると、わざわざパラグアイへ立ち寄ること自体が地域全体へのメッセージともなる。

従来からの固定的な考え方にとられず、『百聞は一見にしかず』を体現すべく日本各界からの来訪を期待したい。

(うえだ よしひさ 在パラグアイ日本国大使)

在パラグアイ日本国大使館 HP コラム

「パラグアイ便り」は、

<http://www.py.emb-japan.go.jp/jap/koramu.html>

ラテンアメリカ参考図書案内



『アンデス山脈を越えるとき』

荒井 緑 中央公論事業出版

2016年7月 365頁 1,400円+税 ISBN978-4-89514-463-6

2007年7月に冬のブエノスアイレスをパートナーのホセとバイクに乗りペネズエラのカラカスを目指して旅立つ。アルゼンチン北西部からチリのアタカマ高地に抜け、パンアメリカン道路をアリカからペルーに入り西海岸を北上、エクアドルとコロンビアを縦断し、マラカイボを経てカラカスに到着。ここから南東にカナイマ国立公園を抜けた先でブラジル領に入り、北端の町ボア・ヴィスタから先住民保護区を通過しアマゾン河中流の大都市マナウスに出て、河を船で下り河口の大都市ベレンに着いた。ここブラジル北東部から海岸沿いの国道をひたすら南下し、ついにウルグアイに入り最後はモンテビデオからラプラタ河の対岸のブエノスアイレスへフェリーで渡河、9月9日に59日間、延々1万8,300kmの旅を終えるまでをその土地毎のエピソードを絡めて記録している。

著者は1988年からブエノスアイレスに在住、『アンデスの空 パタゴニアの風』(2014年 同社刊)に続く南米オートバイ旅日記。

(桜井 敏浩)